KAWAI CULTURAL MUSEUM
川井村北上山地民俗資料館

資料館だより

2000. 10. 28 発行　NO.6

下閉伊郡川井村大字川井2－187－1
☎0193－76－2111（内線84）

聞き取り調査の様子（29日）

館務（かんむ）実習から

7月28日～30日までの3日間岩手大学の博物館学（はくぶつかんがく）を受講する学生25名が民俗資料館で館務（かんむ）実習を行いました。

実習生たちは収蔵庫（しゅうぞうこ）内の資料整理、実測図（じっそくず）整理など基本的な作業の他、2日目には聞き取り調査を行いました。

調査では清水要太郎さん（川井）、高森清志さん（小国）、藤岡冨次郎さん（川内）にご協力をいただき、資料館に寄贈（きぞう）されている資料について作り方や使い方等を伺い、調査用紙に記録しました。それらの資料を実際に使用していた頃の様子にも話が及び、30℃を超える暑い中、一生懸命話してくださる話者のお話を、学生たちは真剣にメモを取って聞いていました。

この館務実習は平成7年から毎年1回夏に行われ、今年で6回目となりました。聞き取り調査では毎回村民の皆様のご協力をいただいております。また大勢の実習生の力は、資料運びや確認作業といった数多くの資料を扱う資料館の土台となる仕事に役立っています。

実習生より　～資料館を見学して～

展示について

＊説明文が足りない。

＊もっとたくさんの映像資料や説明の模型があるとわかりやすい。

資料について

＊資料の多さに驚いた。これは寄贈してくれる人がたくさんいるということを表していると思った。

＊同じ資料でもその数が多いということは、誰もが日常生活で必要としていた道具であるということを表していると思う。多くの道具を見て、それを作り、使ってきた人たちの様子が目に浮かんだ。

留学生の感想

＊ロシアと同じものもあるし、違うものもあります。これはとてもおもしろいと思います。

館内を見学する実習生たち

講話

さきに紹介した館務実習中に行われた合同研修会での講話を紹介します。

講師は岩手大学博物館学実習担当講師で、国立民族学博物館国内資料調査委員でもある名久井文明先生です。「川井村北上山地民俗資料館の価値と活用」というテーマで、民俗資料館に収められている民俗資料とは一体どういう性格を持っているのかあるいはその活用の仕方について分かりやすくお話し下さいました。

川井村北上山地民俗資料館の価値と活用

国立民族学博物館国内資料調査委員　名久井文明

先日、福島県立博物館に友人を訪ねた時、1,200年も前の遺跡から発見されたさまざまな木製品を見ることができました。聞いてみたら、それを発掘した考古学の専門家たちはそれらの正体が分からなかったので、友人のところに持ち込んだのだそうです。彼はすぐその場で、「すりこぎ」「たもの柄」「こも編みのおもり」などと教えてあげたそうです。遺跡を発掘する専門家が分からない出土品の正体が、発掘にはまったく縁のない民俗資料の研究者にはすぐ分かる、というのはたいへんおもしろいことだと思いました。

岩手県内の奈良・平安時代の遺跡からひどく錆びて変形した鉄製の鋤の先や鎌の残片が発見されることがあります。そんな農具の存在から古代の岩手で作物の栽培が行われたことが分かります。しかし同時に私たちは、作物の種を植え、育て、刈り取ってから口に入れるまでに必要な一連の作業が、鋤と鎌だけではできなかったはずだということも知っています。どうしてそれが分かるかというと、何かの穀物についてお年寄りの方に「それはどういう手順でつくりましたか？」「刈り取ってから食べられるようにするまでに、どんな道具を使いましたか？」と伺ってみると、乾燥させる、脱穀する、ごみを除く、貯蔵する、殻を除くなど、さまざまな過程で用いる用具やそれを作る道具が必要だったこと、それらがないと穀物を食べるまでの処理ができなかったことがよく分かります。そこから考えると、古代の遺跡から発見された農具がたとえ鉄製品だけだったとしても、本当は、長い年月の間に朽ちてしまった、木材や樹皮、竹などで作られた、さまざまな用具やそれを作る道具もあったに違いない、ということが分かるわけです。

このように、1,000年以上も昔の遺跡から発見されたさまざまな木製品の正体が分かったり、今は朽ち果ててしまった物の存在を指摘することができるのは、何といってもお年寄りの話と、それを実際に目で確認することができる実物資料の存在に負うところが大きいと思います。山村の生活の様子を具体的に、そして雄弁に物語るそのような実物資料を7,000点も収集しているのがご当地の川井村です。過去40年間にわたって続けられた地道な調査活動に基づいて建設された川井村北上山地民俗資料館に収蔵された資料の内容は多岐にわたっており、しかも網羅的できわめて質が高いものです。全国の国指定有形民俗資料と比べても何ら遜色のない優れた文化遺産であって、質量ともに全国に誇れる資料群であることは間違いありません。

最後にこういった昔の資料の活用について、日頃思っていることを述べてみたいと思います。青森県の有名な三内丸山遺跡から5,000年以上前の小さな篭が発見されました。その作り方を観察すると川井村の資料館にもある「こだす」とまったく同じです。この事実は、山村で暮らしてきたお年寄りの腕の中に何千年も前から受け継がれてきた技術が伝えられていることを表しています。そういう技術を身につけているお年寄りに伺ってみると、「昔はすぐ家の裏でとれたヤマブドウの蔓が、今はずっと山の奥まで行かないと取れない」というのです。造林地になってしまったからだそうです。そんな奥山までは「おれは足が痛くて行けない」というのです。一方、若い人の中にはそんな何千年も昔から伝えられてきた技術を習い覚えたうえで、独創的な製作を楽しんでみたいという人がいます。私はこの両者をドッキングさせることができたらおもしろいのではないかと思うのですがどんなものでしょうか。

畏敬のまなざしで見られる喜びを取り戻したお年寄りが生き生きとしてその腕を振るい、若者がそこから学んで自分の新たな楽しみの世界を創り出す。あるいは伝統的な民俗資料にまつわる昔語りを聞いたお父さんお母さんが、郷土の、そして日本の伝統的文化を見直し、自信を持って我が子に語り聞かせることができるようになった時、その資料は単なる文化遺産から発展して、それぞれの心に喜びや豊かさをはぐくむ「文化資産」として新たな意味をもってくるのではないでしょうか。

ワラビの根を打ってみよう　～企画展のお知らせ～

今年度前半の民俗資料館の調査で、「ワラビ根利用に関する調査」を行いました。かつて「けかじ」などで作物が不作だったときには、食べ物を得るためにさまざまな工夫をしました。中でもワラビの根から採取した澱粉から作った「根もち」は大変おいしいものだったそうです。

しかしワラビの根から澱粉（「はな」と呼ばれます）を取り出す作業は大変な労力を必要としたようです。

企画展では調査の様子や結果、聞き取り調査の情報を展示します。

開催期間：10月28日から12月24日まで
開催場所：民俗資料館企画展示室
（企画展開催中は川井村民の方に限り入館料を無料とします）

ワラビ根（地下茎）を槌で打つ様子（5月29日）

資料を探しています。

民俗資料館では民俗資料、古文書資料など村民の皆様から寄贈、寄託していただいた約7,000点の資料を展示、保管しています。現在資料台帳の整備を行っていますが、衣類（特に仕事着、普段着）が少ないようです。昔の手作りの衣類はそれこそ「ぼろ」になるまでリサイクルされたので、残っていることは少ないかもしれません。それゆえ大変貴重な資料です。もしも自宅に残っている方は、どんな状態のものでもかまいませんので資料館までご一報下さい。

〔民俗資料館 TEL76-2111(84)〕

資料館の周りの植物　館長一言コーナー

これから隔号で資料館の周りの身近な植物について紹介していきます。普段は見過ごしがちですが、こんな木が生えていますよ。

「マンサク」

春一番に「まず咲く」の意味で名前が付けられたそうです。今年は花振りがよかったようです。

私たちが目にする花の時期が終わると、菱形に似た葉がつき、秋にはこんな実がなります。

・・・次号は「川井村の文化財～**坂本一里塚**」を紹介する予定です。

4月～9月までの来館者数

村内各団体の研修や、学習活動の場合、申請していただければ入館料を免除いたします（申請用紙は資料館窓口にあります）。今年度はこれまでにむつわ荘、心生苑、門馬デイサービスの皆さん、門馬小、川井小、江繋小、川井校の皆さんにご利用いただいています。

また一般の来館者では老人クラブの研修旅行に利用されることが多いようです。来館者に記入をお願いしている芳名録を見ると、県内はもとより東北各地、遠くは奈良県や大阪府からも見えています。

（平成12年度4月～9月　単位：人）

	個人					団体					合計
	一般	学生	児童	公.免	合計	一般	学生	児童	公.免	合計	
4月	55	0	6	6	66	0	0	6	0	0	66
5月	108	5	9	12	134	24	0	9	33	57	191
6月	70	0	0	18	88	54	39	0	15	108	196
7月	76	5	1	17	99	59	0	1	109	168	267
8月	143	7	32	15	197	19	0	32	100	119	316
9月	95	3	2	15	115	89	0	2	23	112	227
合計	547	20	49	83	699	245	39	49	280	564	1263

来館者より

資料館ノートに書かれていた来館者よりのメッセージを紹介します。

6月9日

数多い展示に感激しました。川井村民の方々のすばらしい村づくりに拍手します。（福島県からの来館者）

7月13日

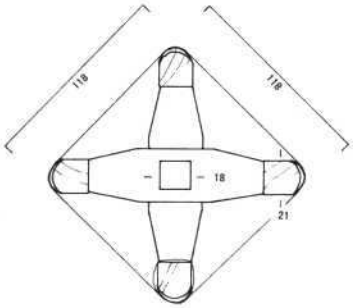
古いものはどんどんなくなってしまいます。今の内に集めておくことはとても大事だと思います。お金で買えない孫への財産です。

7月13日

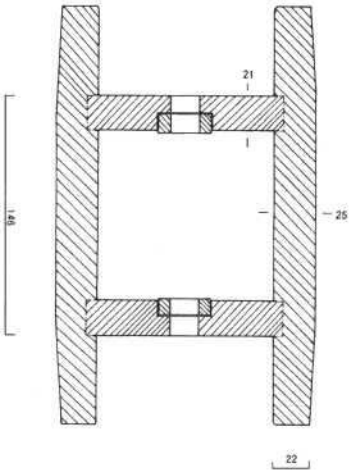
色んなものが見れました。なつかしいものもありました。名前と、何に使われたか、もっと説明がほしいものがありました。

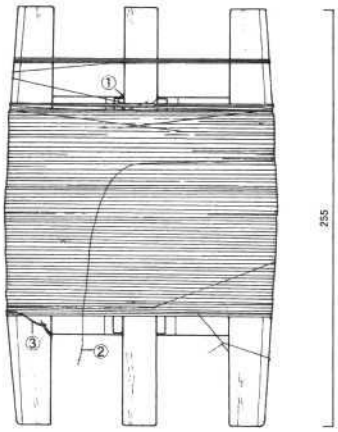
聞き取り調査が終了した資料から今回は２点を紹介します。
１つは鍋で煮た繭から引き出した絹糸を巻いて乾かすための道具です。もう一つは絹糸を得るために飼っていた蚕のえさにするクワの葉を刻む包丁です。

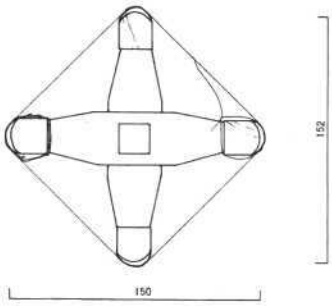
作図者観察点
糸①絹糸(単糸)黒
②絹糸(2本撚り) 緑
③木綿糸　白
内側に①の糸を巻いてその上に②の糸が巻かれている。③の糸は枠の足の部分に一巻され、②の糸の端が結びつけられている。②の糸はところどころに結び目が見られる。



全断面図





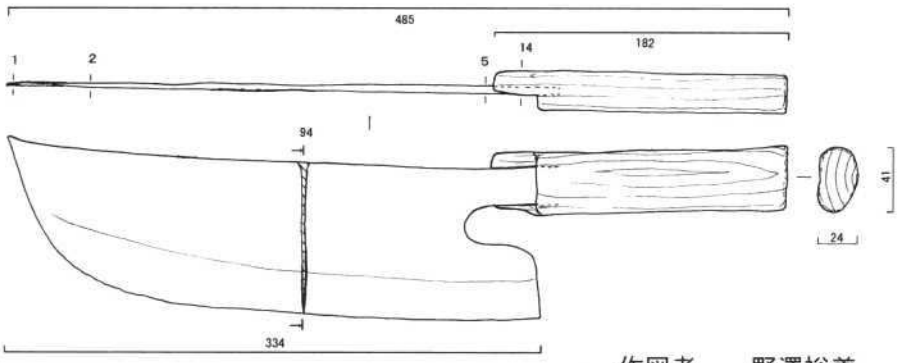


作図者　角舘さえ

伝票番号　6554
資 料 名　呼び名不明（角糸枠）
寄 贈 者　藤岡冨次郎　氏
対 話 者　藤岡冨次郎　氏
形　　状　実際に絹糸が巻いてある。
材　　料　キリ材、絹糸
製 作 者　対話者の祖父
使 用 者　対話者の母
使用年代　1937、8（昭和12、3)年頃まで
使用方法　［胴枠巻］に巻き取った絹糸が乾いてから、この[角糸枠]に糸を巻き取った。
備　　考　繭(まゆ)から糸を取り、反物を織るまでの一連の作業のための道具がそろっている家はほとんど無かった。集落に12、3軒あるうち、1軒くらいのものだった。
さなぎが2匹入っている繭を玉繭(たままゆ)と呼ぶ。これはほぐれにくいために真綿(まわた)を作るのに使った。玉繭は一度にとれる繭の中に1割あるかないかの貴重な繭だった。
調 査 者　市川耕大（岩手大学博物館学実習生）
調査年月日　2000年7月29日

資料6

資料7



片刃

作図者　野澤裕美

伝票番号　2053
資 料 名　クワ切り包丁
寄 贈 者　高森清志　氏
対 話 者　高森清志　氏
材　　料　鉄、ホウノキ材
入 手 者　高森清志
入手方法　鍛冶屋より購入
使用年代　1955(昭和30)年頃
使用場所　自宅土間
使用方法　春先の幼い蚕(かいこ)に与えるクワの葉を切り刻むために使用した。［クワ切り台］の上にクワの葉をのせ、［クワ切り包丁］で蕎麦を切る要領で刻んだ。
備　　考　養蚕指導員のもと、春先の幼い蚕には細かく刻んだクワの葉を与えるように指導された。しかしこの指導は一時的なもので今は行われていない。蚕室がある家はまれで、対話者宅では土間（作業場）で行われた。養蚕をやめた後はこの［クワ切り包丁］は［蕎麦切り包丁］として使用された。
調 査 者　岡部華那（岩手大学博物館学実習生）
調査年月日　2000年7月29日